

第七十九回 ○漢中王 怒りて劉封を殺す

時に建安二十五年なり。延康元年と改む。夏六月なり。
却説、魏王の曹丕、王位に即きて自り、文武・官僚を將ゐ、
南して沛国の譙県を巡る。先坐を大饗す。郷中の父老、塵を揚げ道を遮り、
祖沛に還るの意に効ふ。

是の歳の七月の内、大將軍の夏侯惇 病ひ危ふきを聞く。丕 即ち鄴郡に還る。時に惇 已に卒す。丕 孝
を掛け、東門の外に 殯を送り、厚礼を以て之を葬る。

八月の間、報称すらく、

「石邑県に鳳凰 来儀し、臨菑城に麒麟 出現し、黄龍 鄴郡に現はる」と。

(此の鳳、此の麟、此の龍、胡ぞ来たるや)

丕の手下・百官 商議して曰く、

「今 上天 象を垂るは、乃ち魏 当に漢に代はるべきなればなり。受禪の礼を安排すべし。漢帝をして將
に天下を魏王に譲り与へんとせしめよ」と。

時に有り、侍中の劉廙、字は恭嗣、乃ち南陽の安衆の人なり。侍中の辛毗、字は佐治、乃ち潁州の陽翟
の人なり。侍中の劉曄、字は子陽、乃ち淮南の城德の人なり。尚書令の桓階、字は伯緒、乃ち長沙の臨
湘の人なり。尚書令の陳矯、字は季弼、乃ち広陵の東陽の人なり。尚書令の陳羣、字は長文、乃ち潁州
の許昌の人なり。

這の一班の文武・官僚 四十余人、皆な来たりて、太尉の賈詡、相国の華歆、御史大夫の王朗に見え、共
に此の事を言ふ。

賈詡 笑ひて曰く、

「公等の見る所、正しく吾が機と合ふ」と。

当日、華歆 賈詡・王朗、中郎將の李伏、太史丞の許芝と共に、文武・多官を引き、内殿に直入し、漢獻
帝に魏王の曹丕に禪位せんことを来奏す。つづく。

(一) 祖先の墓をおおいに祭つて。

(二) 行間に書かれた、李卓吾先生の批評です。

(三) 手配・段取りせよ。

第八十回 ○献帝を廢して、曹丕漢を篡ふ

却説、華歆文武を引ききて献帝に来見す。歆奏して曰く、

「伏して觀るに、魏王位に登りて自り以来、徳を四方に布き、仁は万物に及ぶ。古を超へ今を超へ、唐虞と雖も以て此に過ぐるること無し。郡臣會議して言ふらく、漢祚已に終はり、陛下堯舜の道に効ふを望む。山川・社稷を以て魏王に禪与せよ。上は天心に合ひ、下は民意に合ふ。則ち陛下安閑として憂ひ無し。祖宗の幸甚、生靈の幸甚、臣等義定して故に奏知す」と。

帝大いに驚き、半晌無言なり。百官に颯ひて哭して曰く、

「朕高祖三尺の劍を提げ、秦を平らげ楚を滅して、天下を創むるを想ふ。世統相ひ伝ふること四百年なり。朕不才なりと雖も、又た過惡無し。安んぞ將に祖宗の大業等間して棄了せんとすることに忍びん。汝百官、再び公に従ひて計議せよ」と。

華歆李伏・許芝を引ききて前に近づき、奏して曰く、

「陛下若し信ぜずんば、此の二人に聞くべし」と。

李伏奏して曰く、

「魏王即位して自り以来、麒麟は降生し、鳳凰は來儀し、黃龍は出現し、嘉禾・瑞草・甘露下降す。此に是れ上天象を垂れ、魏当に漢に代はるべきなり」と。

許芝又た奏して曰く、

「臣等、司天を職掌す。夜に乾象を觀るに、炎漢の氣數已に終はること見はる。陛下の帝星は隱匿して明るからず。魏国の乾象天を極め地を際り、之を言ふこと尽くし難し。更めて兼ねて凶讖に上応す。其の讖に曰く、『鬼は辺に在り、委は相ひ連なる。当に漢に代はりて言うべきこと無し。言は東に在り、午は西にあり。兩つの日は並び光りて上下に移る』と。此れを以て之を論ずるに、陛下早く禪位すべし。『鬼は辺に在り、委は相ひ連なる』とは乃ち『魏』の字なり。『言は東に在り、午は西にあり』とは乃ち『許』の字なり。『兩つの日は並び光りて上下に移る』とは乃ち『昌』の字なり。此に是れ魏許昌に在りて漢の禪りを応受するなり。願はくは陛下、是を察せ」と。

帝曰く、

「祥瑞・凶讖、皆な虚謬の事なり。奈何虚謬の事を以て、万世・不朽の基業を捨てんや」と。

華歆又た曰く、

「陛下差ふかな。昔日三皇・五帝、徳を以て相ひ讓る。無徳は有徳に讓る。三皇より以後、各々子孫に伝へ、桀・紂の無道に至り、天下是を伐つ。

(献帝汚に畢はり、此に至りて真に人の類に非ざるなり)

春秋の強霸、各々相ひ吞併して、有福は之に居るの後、秦に併せ入り、方に漢に帰するなり。天下は一人の天下に非ず。乃ち天下の人の天下なり。陛下の祖公公に天下を伝へ継ぐ。宜しく早やかに之を退け。久しく疑ふべからず。遅れば則ち變を生ずなり」と。

王朗又た奏して曰く、

「古自り以来、興るもの有れば必ず廢るもの有り。盛んなるもの有れば必ず衰へるもの有り。豈に亡びずの国有らんや。安んぞ敗れずの家有らんや。」

(反りて是れ至言なり)

陛下の漢朝 相ひ伝ふること四百余年なり。氣運 已に極まりて自ら執るべらずして、禍ひを惹くなり」と。

帝 大いに哭す。後殿に入りて去る。百官 晒笑して退く。

次の日、官僚 又大殿に集ひ、宦官をして献帝を入請せしむ。帝 怯懼して敢へて出ず。曹皇后曰く、「今 百官 陛下に朝を設け政を問はんことを請う。何ぞ相ひ推せんや」と。

帝 泣きて曰く、

「汝が兄 漢室を篡はんと欲す。故に百官に令し、朕に相ひ逼る。故に出ず」と。

曹皇后 大いに怒りて曰く、

「汝の言、吾が兄を篡国の賊と為す。汝の高祖、只だ是れ豊沛の一の酒を嗜む匹夫にして、無籍の小輩なり。尚ほ且つ強きに倚り、秦朝の天下を強奪す。吾が父 海内を掃清し、吾が兄 大功を累有す。何ぞ帝と為るべからざること有らんや。汝 即位して三十余年なり。若し吾が父兄を得ざれば、汝 粉と為らん」と。

言ひ訖りて 便ち上車を要し、殿を出でしむ。帝 大いに驚き慌れ、更衣して前殿に出づ。

(献帝 遠からず)

華歆 出班して奏して曰く、

「陛下 臣の言に依り、大禍に遭ふを免ず」と。

帝 痛哭して曰く、

「卿等、皆な漢の禄を食むこと久し。中間に漢朝の功臣の子孫多し。何ぞ一人も朕と与に憂ひを分かつもの無きや」

歆曰く、

「陛下の意、天下を以て魏に禪らず。且夕に蕭牆に禍ひ有りても、臣等 陛下に不忠ならざるなり」

(矣すべきの言なり)

帝曰く、

「誰か敢へて朕を弑するや」と。

歆曰く、

「天下の人、皆な知る、陛下に人君の福無く、以て四海に大乱を致すことを。若し魏王 在朝せざれば、陛下を弑する者は、公庭に塞ぎ満つ。陛下 尚ほ恩は其の徳に報ずるを以てすることを知らざれば、直ちに天下の人に令し、共に陛下を伐たんと欲するなり」と。

帝曰く、

「昔日 桀・紂 無道にして残暴なり。生靈 故に天下の人を惹きて之を伐つ。朕 即位してより以来、三十余年なり。兢兢・業業として、未だ嘗て敢へて半□・非礼の事を行はず。天下の人、誰か之を伐つに忍びん」と。

歆大いに怒り声を励まして言ひて曰く、

「陛下 無徳・無福にして大位に居ること、残暴の君よりも甚だしきなり」と。

帝大いに驚き袖を払ひて起つ。王朗 目するを以て華歆を視る。歆 縦歩して前に向ひ、龍袍を扯住し、色を変へて言ひて曰く、

「許すと許さざると、従ふと従はざると。早やかに一言を発せ」と。

帝 戦慄して答ふる能はず。

忽然と曹洪・曹休の二人、劍を帯びて上殿し、声を励まして問ひて曰く、

「符宝郎 安ここにか在らん」と。

部中を班して、一人出でて曰く、

「符宝郎、此に在り」と。

洪 劍を抜きて玉璽を索し要む。

符宝郎の祖弼 之を叱りて曰く、

「玉璽は乃ち天子の宝なり。安んぞ擅いままに与えんや」と。

洪 喝して武士に令し、提げ出で、之を斬らしむ。祖弼 大いに罵り 口を絶えず、而して死して静かなり。

軒先生 詩有りて嘆じて曰く、

「姦究・専権 漢室 滅ぼす。禅位と称して虞唐に効ふと詐る。満朝・百辟 皆な魏を尊ぶ。僅かに忠臣を符宝郎に見る」と。

帝 戦慄して已まず、只だ階下を見る。甲を被て戈を持すもの数百余人、皆な是れ魏の兵なり。帝乃ち流涕・出血して嘆じて曰く、

「祖宗の天下、何ぞ今日 之を廢するを期せん。朕 死して九泉の下に於いて、何の面目にて先帝に見ること有らんや」と。

泣きて郡臣に告げて曰く、

「朕 願はくは將に天下を魏王に禅らんとせん。幸いにも残喘を留め、以て天の年を終へる」と。

賈詡曰く、

「臣等、安んぞ敢えて陛下に負くや。陛下 急ぎ詔を降し、以て衆心を安んずべし」と。

帝の哭する声 絶えず。乃ち桓階・陳羣をして、禅国の詔を草せしむ。華歆をして詔璽を口捧し、百官を引きて直ちに魏王の宮に至りて献納せしむ。是に於いて曹丕 欣然として喜び、開きて詔を読みて曰く、

「朕 位に在ること三十二年。天下の蕩覆に遭ふて、幸ひにより祖宗の靈に頼り、危くして復た存す。然れども今 天象を仰瞻み、俯して民の心を察するに、炎精の數 既に終りて、行運 曹氏に在り。是を以て前王 既に神武の蹟を樹て、今王 久しく明徳を光耀して、以て其の期に應ず。曆數は昭明にして、信に知る可し。夫れ大道の行はるるや、天下 公を為し、賢を選び能に与す。故に唐堯は厥の子に私せず、而して名 無窮に播す。朕 義なりとして焉を慕ふ。今 其れ踵を堯典に追ひ、位を禅りて丞相・魏王に与ふ。王 辞することを得ること無かれ」

(禅位・遜位 此に至りて亦た舜の門風を壊し極む)

曹丕 聴き畢り、便ち此を受けんと欲す。司馬懿 諫めて曰く、

「王よ、上は軽んずべからず。詔璽已に至ると雖然も、謙辞を上表して、以て天下の人の誇りを絶つべきなり」と。

丕遂に之に従ひ、急ぎ王朗をして表□を作らしめ、印綬を回し、虚辞・謙讓す。王朗等 入内して帝に奏す。其の表に曰く、

「臣丕謹んで詔を受け奉る。伏して惟るに、陛下 垂世の詔を以て、無功の臣に禪りたまふ。臣をして聞き知めて肝胆 摧け裂け、措く所を知らざらしむ。切に以んみるに、堯 大位を賢に譲りて、巢由跡を避け、後世 之を称す。臣才は鮮なく徳は薄し。安んぞ敢へて命を奉ぜん。請ふ、盛世に於いて別に大賢を求め、礼を以て之を識りて、庶はくは萬年の議論を免れたまへ。臣丕謹んで璽綬を納めて還し、死を闕下に待つ。惶懼・戦慄の至に勝へず、表を奉りて以て聞す」

献帝覽じ畢り、甚だ是れ驚き疑ひ、郡臣を回顧して曰く、

（漢帝 華歆を埋むべし、□すべし）

「魏王の謙遜 之のいかんせん」と。

華歆 奏して曰く、

「陛下 唐堯に効はんと欲せ」と。

帝曰く、

「何をか謂ふなり」と。

歆曰く、

「昔 唐堯 二女有り。長曰く娥皇、次曰く女英と。舜に禪位を為すも、舜 堅く辞して受けず。遂に二女を以て之に妻はず。後世 大聖の徳と為して称す。陛下も亦た二公主有り。何ぞ唐堯に効ひて以て魏王に妻はさざるや」と。

帝 已むを得ず、遂に復た桓階に令して詔を草す。高廟使の張音をして、持節して璽を奉ぜしめ、併せて二公主を載せ、魏の王宮に逕入す。曹丕開きて詔を読みて曰く、

「惟れ延康元年十月己酉（七日）、皇帝詔して曰く、咨 爾 魏王、上書・謙讓、朕 切に為ふに、漢道陵遅し、日 已に久しきことと為る。幸ひに武王たる操の徳 符運に膺り、神武を奮揚し、兇暴を芟夷して、区夏を清定す。今 王たるは前緒を継ぎ承け、至徳は光昭なり。声教は四海に被び、仁風は鬼区を扇ぐ。

天の歴数 実に爾の躬に在り。昔し虞舜 大功 二十有りて、而して放勳 禪るに天下を以てす。大禹 疏導の績有りて、而して重華 禪るに帝位を以てす。漢 堯の運を承け、伝聖の義有り。加々 靈祇に順ひて、天の明命を紹ぐ。二女を釐めて降し、以て魏に嬪せしむ。行御史大夫の張音をして、節を持して皇帝の璽綬を奉ぜしむ。永く人君と為す。万国 天威を敬し、允に其の中を執れ。天祿 永く終へん。之を敬しめ」

（婚書や、禪詔や。何ぞ善く堯舜に比するを把へ、壊し了るか。曹丕の本意 直に漢宮を橋し、其の身を□し、其の女を虜とするに如かず。□且つ真率 何ぞ必ずしも塗りて打□。此れ一黙の良心なり）

（一）すみません。全然 読めません。

張音詔を辞して至る。曹丕欣喜す。暗かに賈詡に与へて曰く、

「二次に詔有りと雖も、孤但だ天下に篡逆の名を除く能はざるを恐るなり」と。詡曰く、

「此の事、極めて易し。再び張音に命じて璽綬を□回すべし。却りて華歆に教へて漢帝をして一台を築かしめよ。受禪台と名づけ、吉日・良辰を択び、大小の公卿・四夷・八方の人を集めよ。尽く台の下に至れば、天子をして親から璽綬を奉じ、天下を禪り王に与へしめよ。以て智者の口を絶つべし」と。丕大いに喜び、即ち張音をして璽綬を捧回せしむ。仍りて表を作りて謙讓す。音回りて献帝に奏す。帝郡臣に問ひて曰く、

「魏王意無し。卿等若何せん」と。

華歆奏して曰く、

「陛下一台を築き、名づけて受禪台とすべし。公卿・庶民を集めて明白に禪位すれば、則ち陛下子々孫々に必ずや魏の恩を蒙らん」と。

漢帝之に従ふ。乃ち太常院官をして地を繁陽に卜し、繁陽に三層の高台を築起せしむ。十月庚午日の寅刻に於いて、時に当たり、献帝議曹の曹丕に台に登壇するを請ふ。受禪台の下、大小の官僚四百余員、御林・虎賁の禁軍三十余万並びに匈奴の单于、化外の人が集ふ。帝親から玉璽を捧げて曹丕に奉る。丕之を受く。台下の郡臣跪きて冊を聴きて曰く、

「咨爾魏王よ。昔者帝堯虞舜に位を禪り、舜も亦た以て禹を命ゐる。天命常に於いてせず、惟だ有徳に帰す。漢道陵遅して、世々其の序を失ふ。朕が躬に降り及び、大乱茲昏、羣凶肆ままに逆らひ、宇内顛覆す。武王の神武に頼りて、茲の難を四方に拯ひ、惟区夏を清め、以て我が宗廟を保綏す。豈に予一人又むるを獲んや、九服をして実に其の賜を受けしむ。今王欽みて前緒を承け、乃が徳を光す。文武の大業を恢め。『爾度れ、虞舜に克く協ひ、用て我が唐典に率ひ、敬みて爾が位を遜れ』と。於戲、天の歴数爾の躬に在り。允に其の中を執り、天の祿永く終らん。君其れ祇みて大礼を順ひ、萬國を饗け、以て肅みでに天の命を承けよ」と。

冊を読むこと已に終わる。魏王の曹丕即ち八般の大札を受け、帝位に登り了る。賈詡大小の官僚を引きて、台下に朝す。

延康元年を改めて、黄初元年とす。国号は大魏とす。曹丕聖旨を伝えて普ねく天下の罪犯を赦す。父の曹操に諡して太祖武德皇帝とす。華歆奏して曰く、

「天に二日無く、民に二王無し。即ち已に天下を交割す。劉氏をして何れかの地に安置せよ」と。言ひ訖るや、献帝台下に跪き、旨を聴く。

賈詡奏して曰く、

「封を以て公卿と為せ」と。

即日便ち行ひ、丕遂に帝を封じて山陽公と為す。

華歆劍を按じて帝を指し、声を励まして言ひて曰く、

「一帝を立て、一帝を廢するは、古の常礼なり。今上の仁恩害を加ふるに忍びず。汝を封じて山陽公と為す。今日便ち行け。宣召非ずんば、入朝することを許さず」と。

献帝 涙を含みて拝謝し、馬に上りて去る。

台下の軍民・夷狄、大小の人等、之を見て傷感して已まず。丕郡臣に与へて曰く、

「堯舜の事、朕之を知るかな」と。

郡臣皆な万歳三声を呼ぶ。後人此の受禅台を觀て詩有りて嘆じて曰く、

「鳶鴟・獾鼠・腥さく、狐 臊さし。鬼は野を吹き、火は蓬蒿を焼く。此の台禅と名づけども、人禅らず。斯の地 高き道と雖も、高からず。黄土の一堆、真に恥づべし。虚はり巍巍として在り、空裏を半にす。唐虞の揖讓の風を壊却し、乱臣・賊子 此れより起こるなり」と。

又た詩に曰く、

「兩漢 經營すること四百年。小平津の畔、独り潜然とす。黄初 唐虞の意を解せず、土を築きて台を成し、晋宣に教ふ」と。

(果然として、晋宣 一の様子を作る)

又た宋賢 詩有りて曰く、

「墨士 曾て受禅台を營し、漢帝を欺き凌ぐこと、嬰孩の若し。誰ぞ天意を知り、私曲無からん。久しくせず然るに依り、主を換ふるもの来る」と。

又た曹丕を諷刺して詩に曰く、

「曹丕 覇を強ひて乾坤を奪ふ。悪を積み殃ひに遭ふこと、子孫に及ぶ。受禅の高台、猶ほ自ら湿らすがごとし。誰ぞ知る、司馬 又尊を称するを」と。

又た詩に曰く、

「当年 曹氏 劉を強ひて吞す。自ら兒孫の為に、万秋を楽しむ。受禅層台 司馬の上るは、山陽 還りて、陳留に似ることを得る」と。

漢献帝 山陽を望みて去る。百官 曹丕に請ひ、曹丕 天地に答謝す。丕 方に下拜せんとするに、忽然と台前に一陣の怪風が捲き起こり、砂を飛ばし石を走らす。急なること驟雨の如し。面に対ひて見えず。台上の火燭、尽く皆な滅す。丕 驚きて台上に倒る。百官 急ぎ来たりて、之を救ふ。未だ性命の如何を知らず。

却説、文武 曹丕を救ふを得て、台を下る。半晌、方に醒む。自身 宮中に扶け入る。数日、朝を設く能はず。後に病 稍々可し。華歆を司徒に封じ、王朗を司空に封じ、大小の官僚、一一賞に陞る。其の驚疾未だ痊たるに、車駕を却排し、許都より洛陽に幸す。大いに官室を建て、早やかに人有りて到り了る。(山陽の受禅、扮戲なること分明なり。然るに皆 操の遺奸なり。操の奸雄たること、此に至りて極まるかな。……)

(一) 晋の宣帝とは、司馬懿のこと。

(二) 李卓吾本が挿入する詩は、曹丕の受禅を不当と見なし、後に曹氏が司馬氏に対して禅讓させられ、その報いを受けたとするものばかりである。